

リレー 随 想

第6回

「福岡いのちの電話」教育委員
荒浪 聖



「解き放ち人としてのサポーター」

私が今住んでいる奈多団地には、「お助け隊」という民生委員を中心にしたボランティアの会がある。40年前にできたエレベーターのない5階建ての団地で、高齢化が進み、週2回のゴミ出しも難しい世帯が増えてきて、住民の助け合い活動として始められたが、お助け人も高齢者であることが特徴？ でもある。

さて、表題の「解き放ち人」については、高次脳機能障がい者の通所事業所「翼」に勤めていた時、職員や通ってくるメンバーさん達の関係から思い至ったものである。高次脳機能障がいの原因である脳損傷は、事故等からの外傷性と病気等からの内傷性等があるが、「翼」のメンバーさんはほぼ半々である。どちらにしても命にかかわる急性期は、生命維持のための医療処置が第一で、安定期になるとリハビリテーション等の社会復帰のための訓練が始められる。

ドクターやセラピストが支援者（サポーター）の中心に考えられがちだが、専門の見地からのプログラム等はそうであっても、当事者（本人）にとっての一番のサポーターは家族であることは言うまでもない。「翼」も、家族の方々が、「安心できる居場所づくり」として始められた小規模作業所から、現在はNPO法人地域支援センターとして、定員1日15人（登録者は30人ほど）で活動している。

メンバーさんは、一人ひとりの状況が異なり、週4

日から1日の人まで、また単独で通える人、家族や付き添いサービスを利用する人など様々な形で通っている。職員は4人、家族ボランティアも作品づくりの作業などに参加してくれている。マンションの一室で狭いため多くの人を受け入れるのは困難であるが、笑顔と会話にあふれ、日々のプログラムを展開している。

時々自分の患者を依頼してこられる医師から、「翼」に行き始めた人はどうしてあんなに明るくなって、安定し、ステップアップを考えられるようになるのか？と問われたことがあるが、一番の力はメンバーさん同士の受け止めと関係があると回答した。注意力や記憶力、集中力等に程度の差こそあれ障がいがある「あるがままの自分」をカミングアウトでき、受け止められる安心感が心を解き放ち、希望も言えるようになり、家族もまたいろいろの事柄から解き放たれ、家庭内でも高次脳機能障がいへの理解も進みよい結果を生みだしていると思われる。

解き放ち人の役割を果たしているサポーターは、専門性に基づいた教え人や治療人・訓練人だけではなく職員や家族、メンバーさんも含んでおり、共に歩んでいるのだと、いつも伝えている。

いのちの電話の相談員が、この「解き放ち人」であってほしいと願っている。

福岡いのちの電話チャリティコンサート 弦楽演奏の夕べ

「いのちの響き」を最上のキャストでお届けします。
2017年3月10日(金)午後7時開演
都久志会館ホール(福岡市中央区)
入場料 2,000円(全席自由)

~~~~ 演目 ~~~

ベートーヴェン 弦楽三重奏曲 第1番 変ホ長調 作品3  
ブラームス 弦楽四重奏曲 第3番 変ロ長調 作品67



ヴァイオリン  
原 雅道



ヴァイオリン  
大山 佳織



ヴィオラ 大山 平一郎



チェロ  
原田 哲男